



井伊家伝来の能道具と十五代直忠

なおただ

彦根城博物館の収蔵品の核は、江戸時代を通して代々彦根藩主をつとめた井伊家に伝わった美術工芸品や古文書です。この内、能道具は、面、装束、小道具などをあわせて千二百件以上におよび、それぞれの主要な種類をほぼ網羅した、大揃いのコレクションとして知られていません。

能が幕府の式楽（公的な儀礼で行う楽舞）に定められた江戸時代、大名家は、幕府に倣って頻繁に能を催し、演能に必要な面や装束などを調達しました。彦根藩井伊家もさまざまな行事で能を行い、面や装束、小道具などを数多く所有していたことが分かっています。

この江戸時代の井伊家の能道具こそ、当館が所蔵する能道具であると想われるかもしれませんが、実はそうではありません。そのほとんどは、明治から昭和の井伊家当主である、十五代直忠（一八八一〜一九四七）が収集したもののなのです。

直忠は、観世流の能役者である梅

若万三郎や六郎に師事し、生涯、能に打ち込んだ人物です。当時、代々井伊家が所蔵してきた能道具のほぼ全てが東京の井伊家本邸で保管されていたことが、大正十二年（一九三三）の関東大震災によって他の伝来品とともに罹災し、残念ながら失われてしまいました。その後、これらを補うべく、新たに収集し、また発注して作らせたものが、現在の井伊家伝来能道具です。

その中心を成すのは、売立で購入するなどした旧大名家の伝来品です。例えば、深い紺地に、枝垂れかかる柳、水草と流水を表した縫箔（写真①）は、昭和四年（一九二九）の越前松平家の売立目録に掲載された写真から、同家の伝来品と判明します。また、代々の当主が能を愛好したことで知られる加賀前田家の昭和十一年（一九三六）の売立目録には、当館を代表する能装束のひとつである、竹格子に寿の字や鳳凰を配した翁狩衣（写真②）のほか、井伊家伝来品一点の写真が確認できます。

これら以外にも、墨書や附属品などから松平家伝来と判断されるものは十数点、前田家伝来品は七十点あり、これらもそれぞれの売立に際して入手した可能性が高いとみられます。

井伊家の能道具中、四十三点を数える鳥取藩池田家旧蔵の能面は、大正八年の売立の際に観世流の能役者である橋岡久太郎が購入したものの一部で、震災以降、橋岡との面の交換によって直忠のコレクションに加わりました。

この他、酒造業で財を成した伊丹の小西家や、名古屋能楽界の支援者であった豪商・関戸家の売立でも、室町時代の古面を含む能面九点を入手しています。

このように、直忠は非常に精力的に能道具の収集に努め、結果、旧大名家伝来の優品を多数含む、質の高いコレクションが形成されました。井伊家伝来の面や装束は、直忠の能に対する思い入れの深さを物語るものともいえるでしょう。

【彦根城博物館学芸員 茨木恵美】



写真②
翁狩衣 茶地斜め竹格子鳳凰丸桐菊寿字文様（当館蔵）



写真①
縫箔 紺地柳と流水に水辺草文様（当館蔵）

写真①の作品は、常設展示で8月28日水まで展示します（期間中無休）。